

こ え

2013年11月

日本聖公会中部教区名古屋学生青年センター

第66号

日本聖公会東日本大震災被災者支援 「いっしょに歩こうパートⅡ」 原発と放射能汚染に関する特別問題プロジェクト

池 住 圭

「いっしょに歩こう！パートⅡ」～2つの柱～

「いっしょに歩こう！プロジェクト」は、2年間の働きを終え「パートⅡ」として今年6月から新たな歩みを始めました。「パートⅡ」には2つの柱があります。一つは、被災者支援室「だいじに東北」で、もう一つは「原発と放射能汚染に関する特別問題プロジェクト（以下原発問題PJ）」です。

「だいじに東北」は、東北教区が主体的に行う活動で、「被災者支援センターしんち」の継続と磯山聖ヨハネ教会の再建を主な活動とし、他に、被災地の巡礼や地域の人達との交わりを通して活動を行う予定です。また、「原発問題PJ」との協働も大切な働きの一つです。

「原発問題PJ」は、「原発事故の影響について、深い関心を持ち、情報を収集・発信し、国内外に対し責任ある活動を行います」という、「いっしょに歩こう！プロジェクト」の活動方針と、2012年日本聖公会総会決議「原発のない世界を求めて—原子力発電に対する日本聖公会の立場—」に基づき設置されたものです。主な活動は、東京電力福島第一原子力発電所の事故による被災者の支援と、原発に関する調査・研究、広報活動で、被災者支援チームと調査・研究、広報チームがそれぞれの役割を担っています。

ますますひどくなる現状

福島第一原発は、震災から2年半以上がたった今も、放射性物質を放出し続けています。ことに汚染水の流出は深刻さを増し、その拡大を制御できない状態が続いている。汚染水だけではなく、大気汚染、海洋汚染、大地や植物に堆積する汚染等々が、今後どのように広がっていくのか予想さえつきません。

なにより、避難を余儀なくされた34万人を超える人々から故郷を奪い、土地を奪い、家族や共同体を破壊しました。餓死や殺処分された動物、置き去りにされたまま命を長らえている家畜やペットの悲惨な姿、そして、主を失くし、荒廃した家屋や田畠に言葉を失います。悲しいことに、自らの生命を断つ被災者の数も増えています。

一方、避難をしなかった人達も、はかり知れない不安と恐怖、深い悩みを抱きながら日々を送っています。子ども達への影響は一層深刻です。想像してみて下さい。マスクをして積算線量計を首から下げて登園して来る園児。園庭に出ることを許されない園児。そっちは汚染されているから行かないで、その土は触らないで、常に「ダメダメ」を連発しなければならない保護者や保育者

の不安とストレス。汚染は目に見えない、臭わない、感じない、それでも子ども達に理解をさせ、我慢を強いなければなりません。思い切り体を動かし、日の光や風を感じ、直に土に触れるこの大切な時期にある子ども達です。子ども達の心身に与える影響は、放射能汚染だけではありません。

さらに、除染の問題があります。剥がされた土や除染後の水の処分が出来ないでいます。ビニールシートに包んで園庭に埋められただけの汚染土。コンクリート製の容器に入れられたまま、軒下に野ざらしにされている汚染土。処分場が確保されないままの、「除染」ではなく「移汚」です。広大な里山は、除染の可能性がほとんどないまま放置されています。これが、日常であり現実です。原発の問題は、大都市では引き受けられない危険物を地方都市に押し付けるという、差別の問題でもあります。

このような現状であるにも関わらず、政府は原発推進の姿勢を崩しません。それどころか、脱原発や原発依存を減少するよう舵を切った先進諸国とは裏腹に、原発推進に向う国々に対しては、その輸出をしようとさえしています。福島第一原発の事故から、何ら学んでいないのです。経済優先、人だけではない、全ての生き物の「いのち」の軽視です。

原発問題プロジェクト

プロジェクトでは、これまで聖公会・関連幼稚園の園児と卒園生、幼稚園教諭、保護者等を対象に、リフレッシュプログラムなどの主催をしてきましたが、本格的な活動はこれからです。

原発は安全、安価、クリーンという、全く事実に反する情報を認証し、原発事業を許してきた者として、原発事故が私達に何をもたらしたのか、被災者の声と共に国内外に発信し続ける責任があります。この現実を背負わせてしまった未来の子ども達からは、これから私達がどのような道を選び取り、どのように生きていくのかが問われるでしょう。私達には、明確に答える義務があります。

プロジェクトでは、被災者への支援をその主な活動に、二度とこの過ちを繰り返さないために、放射能に関する調査・研究をしながら、原発に依存しない生活のあり方を求めていきたいと考えております。さらに、この「FUKUSHIMA」の眞の姿と被災者の声を国内外に発信し続けると同時に、原子力政策に対して「否」と言い続けて参りたいと考えております。

（原発と放射能汚染に関する特別問題プロジェクト事務局長）